

平成28年度病弱班における研究成果普及活動の報告

—地域における「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」を活用した研修を中心に—

森山貴史*・深草瑞世**・新平鎮博***

(*研修事業部) (**インクルーシブ教育システム推進センター) (***)研究企画部)

要旨：本稿では、平成28年度に病弱班が取り組んだ研究成果普及活動について、地域における「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」を活用した研修を中心に報告する。まず、病弱班が平成26～27年度に行った専門研究 B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究」の概要と、その研究成果に基づいて作成した「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」の目的や内容、活用方法についてまとめた。次に、「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」を活用した研修の内容と参加者アンケートの結果を報告した。参加者アンケートの結果から、今回試みた研修は参加者のニーズに概ね応えることができたものと考えられた。また、「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」について、研修テキストや実態把握の参考資料として有用であるという意見が多く寄せられた。今後の展望として、この研修を教育センターや特別支援学校（病弱）が主体となって実施しやすいように、パッケージ化することの重要性を指摘した。

見出し語：病弱教育、教育的ニーズ、研究成果の普及、研修

I. はじめに

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の第4期中期目標期間における「研究基本計画」（平成28年3月）にて、病弱・身体虚弱等にある子どもの特別支援教育に関する研究班（以下、「病弱班」という。）では、「基礎的研究活動」の重点として「研究成果を利用した研修、セミナー等の実施による病弱教育に関する普及活動」を掲げている。

本稿では、病弱班が平成26～27年度に実施した専門研究 B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究」の研究成果普及活動について報告する。具体的には、上記研究の研究成果に基づいて作成した「病気の子どもの教育支援ガイド（試案）」を活用した研修（セミナー）の成果を踏まえて、今後の研究成果普及活動の在り方について検討する。

II. 専門研究 B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童

生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究」の概要

ここでは、専門研究 B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究（平成26～27年度）」の概要を述べる。

本研究は、①慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズ及びそれに応じた支援・配慮について改めて分類・整理する、②特別支援学校（病弱）のセンター的機能を中心に基礎的環境整備の在り方について検討する、③以上を踏まえて、小・中学校等に在籍している慢性疾患のある児童生徒への合理的配慮の検討・提供に資する基礎資料（ガイドブック）を作成する、という3点を目的として取り組んだ。

特別支援学校（病弱）の教員311名を対象に行った「慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと教育的配慮に関する調査」の結果、慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズは、「学習」「自己管理」「対人」「心理」「連携」の5つのカテゴリーとそれらを構成する14のサブカテゴリーに分類・整理され、それらに応

じた支援・配慮も整理した(表1)。これらは、疾患に関するニーズなど個性が強いとされる慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズを捉える上で、教員が押さえておくべきミニマムな観点として、合理的配慮の決定プロセスにおいて、児童生徒の実態把握等を行う際の参考資料になり得ると考えた。

また、研究協力機関のある地域における小・中学校及び高等学校の教員(養護教諭含む)を対象として、同様の調査を行った。その結果、上記カテゴリーに該当しないデータが半数以上であった。この非該当のデータは、学校行事に関すること(例:学校行事への参加)や個々の病気に関すること(例:心臓病)、環境整備に関すること(例:学習環境の整備)、アレルギーに関すること(例:食物アレルギー)、薬の管理に関すること(例:糖尿病の薬の管理)等であった。以上のことから、慢性疾患のある子どもの教育的ニーズについて、特別支援学校(病弱)の教員と小・中学校等の教員間で捉え方の相違があることが推察された。地域の病弱教育のセンター的役割を担っている特別支援学校(病弱)は、このことを十分留意した上で、小・中学校等に情報提供や支援を行う必要があることを指摘した。

これまで述べてきたことは研究内容の一部であるが、このような研究成果に基づいて、「病気の子ども

の教育支援ガイド(試案)」^{注1}(以下、「ガイドブック(試案)」という。)を作成した。次項では、このガイドブック(試案)の目的や内容、活用方法等について述べる。

注1: 専門研究 B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究(平成26~27年度)」研究成果報告書では、「教職員向けガイドブック『病気の子どもの支援ガイド(試案)』」という名称であったが、その後の検討を経て、「病気の子どもの教育支援ガイド(試案)」という名称に変更した。そのため、本稿ではこの名称を用いる。

Ⅲ. 「病気の子どもの教育支援ガイド(試案)」について

1. 目的と意義

本ガイドブック(試案)は、特別支援学校(病弱)のみならず、小・中学校、高等学校等の教職員が病気の児童生徒の教育的ニーズについての理解を深め、ニーズに応じた支援・配慮を行えるよう、必要な情報を具体的に分かりやすく提供することを目的としている。この目的を達成するためには、まずは多く

表1 慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズのカテゴリーと支援・配慮の視点

教育的ニーズ		支援・配慮の視点
カテゴリー	サブカテゴリー	
学習	学習指導	学習環境の整備, 学習状況の把握, 指導時間の確保, 指導体制の工夫, 指導内容の精選, 学習進度の調整, 体調や心理面への配慮, 教材・教具の工夫, 授業展開の工夫, 教師の声掛け
	前籍校	前籍校の担任との連携, 交流活動の実施
	経験	経験の機会の設定, 語彙の拡大
	進路	進路支援
自己管理	自己理解・病気の理解	病気や治療の理解の促進, 自己理解の促進, 情報収集・共有
	自己管理	生活上の制限の理解, 自己管理支援, 基本的な生活習慣の確立, 関係者間の情報共有
	ストレス	ストレスマネジメント, 教師の関わり, 関係者との連携
対人	人間関係	集団参加の場の設定, 集団活動への参加方法の工夫, 教師の役割, 家族との関係
	コミュニケーション	コミュニケーションの場の設定, 必要な支援の要求, 社会性の育成, 教師の態度・関わり方
心理	自己肯定感・自己効力感	成功体験や賞賛される経験を積み重ねる機会の設定, 教師の声掛け
	心理的な安定	感情のコントロール, 興味・関心のある活動の設定, 受容的な関わり, 授業等での工夫
	不安	不安の軽減, 家庭や医療機関との連携
連携	医療等との連携	医療等との連携
	保護者との連携・支援	保護者との連携, ストレスのケア

の方に読んでもらう必要があり、分厚い解説書ではなく、コンパクトにまとめた冊子にすることを目指した。そのため、掲載する情報は必要最低限の内容とし、詳しい情報を得たい人のために情報ソースを掲載したり、関連資料を紹介したりすることとした。

また、ガイドブック（試案）の意義として、以下の二点が挙げられる。

- (1) 特別支援学校（病弱）の教員が日常的に何気なく実践していると思われる内容について「見える化」し、小・中学校等の教員にその情報を提供することで、学校種による教育的ニーズの捉え方の相違を補完することができる。
- (2) 特別支援学校（病弱）や病弱・身体虚弱特別支援学級の教員間で普段の実践や児童生徒との関わり方等を振り返ったり、病弱教育の経験の少ない教員の研修を行ったりする際に、必要な情報を共有するツールとして活用できる。

2. 内容構成

ガイドブック（試案）は、「病弱教育に関する基礎的・基本的な内容」、「病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮に関する内容」、「合理的配慮に関する内容」という3つの要素で構成されている。この中で、「病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮に関する内容」がメインの内容である。上記研究で明らかにした慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズのサブカテゴリーごとに支援・配慮のポイントを解説するとともに、具体的な支援・配慮例を示した（図1）。加えて、小・中学校等の教職員がイメージしやすいように、研究協力機関の特別支援学校（病弱）における指導・支援のエピソードも掲載した。

3. 活用方法

ガイドブック（試案）の活用方法の一例を以下に示す。

- ・病弱教育の経験の少ない教員が基礎的・基本的な内容を理解するための研修テキストとして活用する。
- ・ケース会議等で病気の子どもの実態把握を行う際に、特定の内容に偏った話し合いとならないよう、関係者間で共有する参考資料として活用

- する。
- ・入院中の子どもが復学する際の支援連携会議等で、特別支援学校（病弱）や病院内にある病弱・身体虚弱特別支援学級の教員と前籍校の教員とで復学後の支援・配慮を検討する際の参考資料として活用する。

次項では、ガイドブック（試案）を活用した研修（以下、「ガイドブック（試案）活用研修」という。）の概要について述べる。



図1 ガイドブック（試案）における「病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮に関する内容」の構成イメージ

IV. ガイドブック（試案）活用研修の概要

1. 研修内容

病弱班では、上記研究の研究協力機関であった特別支援学校（病弱）3校と連携して、研究成果の普及を兼ねた研修会を平成28年度中に3つの地域で実施した。各回とも特別支援学校（病弱）や地域のニーズに応じて、研修の趣旨や内容に若干の違いはあったが、基本的には「病気の子どもへの教育的支援の充実」を大きなテーマとして、おおよそ表2に示した内容（流れ）で実施した。

なお、いずれの研修会においても病弱班の研究員が講師として参加した。

表2 主な研修内容の流れ

1 特別支援教育の動向
・インクルーシブ教育システム構築
・合理的配慮, 基礎的環境整備 など
2 病弱教育の現状と課題
・文部科学省「学校基本調査」の結果から
・特別支援学校(病弱)等に在籍する児童生徒の実態など
3 病気の子どもの教育的ニーズと合理的配慮
・病気の子どもの教育的ニーズの検討(ガイドブック(試案)を活用した講義・演習)
・インクル DB ^{注2} の合理的配慮実践事例の紹介
4 まとめ
・研修内容の振り返り, 今後の展望

また、「3. 病気の子どもの教育的ニーズと合理的配慮」では、ガイドブック(試案)掲載の事例検討シート(図2)を用いた演習を行った。本シートは、病気の子どもの教育的ニーズとそれに応じた支援・配慮を検討するためのシートで、表1に示した教育的ニーズのサブカテゴリーごとに整理することができる様式になっている。

項目	教育的ニーズ 内 容	実施可能な支援・配慮 (誰が、いつ、どこで)
病気・障害 に関すること		
学習面	<input type="checkbox"/> 学習指導	
	<input type="checkbox"/> 前籍校(転校を伴う場合)	
	<input type="checkbox"/> 経験	
	<input type="checkbox"/> 進路	
自己管理	<input type="checkbox"/> 自己理解・病気の理解	
	<input type="checkbox"/> 自己管理	
	<input type="checkbox"/> ストレス	
対人面	<input type="checkbox"/> 人間関係	
	<input type="checkbox"/> コミュニケーション	
心理面	<input type="checkbox"/> 自己肯定感・自己効力感	
	<input type="checkbox"/> 心理的な安定	
	<input type="checkbox"/> 不安	
連携	<input type="checkbox"/> 医療等との連携	
	<input type="checkbox"/> 保護者との連携・支援	
	<input type="checkbox"/> 施設・設備	
その他		

図2 演習用の事例検討シート

注2: 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所のWebサイト「インクルーシブ教育システム構築支援データベース」の略称。

2. 参加者の声

ガイドブック(試案)活用研修は計3回実施し、参加者数は合計179名で、内訳は小学校教職員23名、中学校教職員11名、高等学校教職員1名、特別支援学校教職員136名、その他の職種8名(保健師など)であった。研修終了後、簡易な参加者アンケートを実施し、研修の感想やガイドブック(試案)の改善に向けた意見をいただいた。回収率は90.5%であった。

1) ガイドブック(試案)活用研修について

ガイドブック(試案)活用研修全体について、「有意義であった」73%、「どちらかといえば有意義であった」26%であった(図3)。

また、「有意義であった」、「どちらかといえば有意義であった」と回答した理由に関する自由記述について、表3に示したように分類・整理した。「ガイドブックの有効性」に関する記述が71あり、最も多かった。その中で、病気の子どもの教育的ニーズや支援・配慮の内容の分かりやすさを指摘する記述が約半数であった。

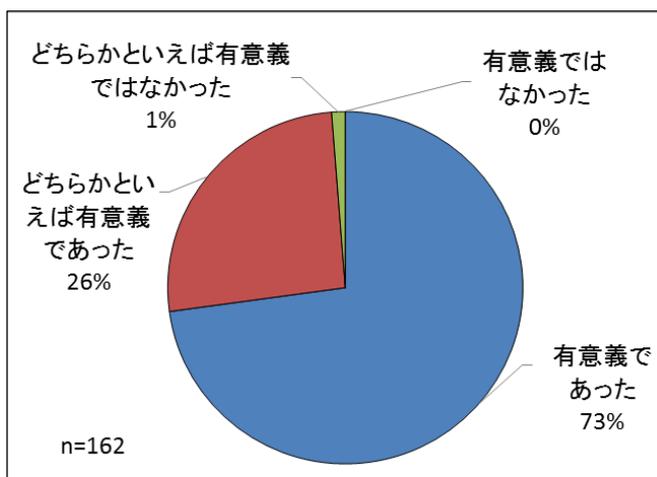


図3 ガイドブック(試案)活用研修の評価

研究報告

表3 ガイドブック（試案）活用研修が「有意義であった」「どちらかといえば有意義であった」と回答した理由

分類項目（記述数）	記述の一部抜粋	
ガイドブックの有効性(7)	教育的ニーズや支援・配慮の内容が分かりやすい(32)	教育的ニーズのカテゴリー毎のポイント解説、支援・配慮の視点、例示等がわかりやすい。
	エピソードが参考になる(14)	事例があり、具体的にイメージしやすかった。
	演習用の事例検討シートが有用である(13)	ニーズの把握がやりやすい。そこから配慮へと考えていける。共通理解ができる。
	センター的機能の充実に資する(3)	小・中・高の病弱児生の支援について、本校がセンター的機能として訪問していくときに活用していくことができるかなと思います。
	その他(9)	体系化されていることで経験の浅い教員でも安心して使える。
合理的配慮について理解できた(17)	合理的配慮と基礎的環境整備についてよく理解できた。今後の研究にも生かしていける内容だった。	
日頃の実践を整理できる／実践に生かせる(10)	多角的に支援・指導を考える契機となった。	
その他(23)	在籍する児童生徒の個別的教育支援計画の作成や自立活動の構想を練ることにも有効な教示をいただいた。	

2) ガイドブック（試案）の活用方法について

ガイドブック（試案）の活用方法として、「病気の子どもたちの教育的ニーズ等を把握する際に活用できる」、「病気の子どもへの教育的支援・配慮について検討する際に活用できる」、「病弱教育の基礎的・基本的な内容を理解するための研修テキストとして活用できる」という3点についてうかがった結果を表4に示した。いずれも「そう思う」という回答が多かったが、研修テキストとしての活用については6名から「そう思わない」という回答があった。これは、ガイドブック（試案）を研修テキストとして使うイメージがもてないことが主な理由であった。

表4 ガイドブック（試案）の活用方法

n=162 (名)

	そう思う	そう思わない
① 病気の子どもの教育的ニーズ等を把握する際に活用できる	161	1
② 病気の子どもへの教育的支援・配慮について検討する際に活用できる	161	1
③ 病弱教育の基礎的・基本的な内容を理解するための研修テキストとして活用できる	156	6

3) ガイドブック（試案）の改善すべき点について

ガイドブック（試案）の改善すべき点に関する記述の一部を以下に示す。

- ・主な疾病に対する具体的な支援の方法を知りたい。
- ・重症心身障がい（超重症児）の教育的ニーズはカテゴリー化も難しく、とても限定されるように思われる。ねらいをしっかりと共通理解できないと難しい。
- ・教育的ニーズのエピソード事例を4～5例あげてほしい。ガイドブック中の表あるいは記事の字をもう少し大きくしてほしい。



写真1 研修会の様子

V. 研究成果普及活動の成果と今後の展望

最後に、病弱班の研究成果普及活動として行ったガイドブック（試案）活用研修の成果と今後の研究成果普及活動の在り方について若干の考察を加えたい。

病弱教育に関する研修会の多くは、特別支援学校（病弱）の教員や病弱・身体虚弱特別支援学級の担当教員が対象者として想定されている。その中で、病院内にある病弱・身体虚弱特別支援学級の担当教員は、研修等で出張に出る際に代替教員が望めないなどの問題があり、少々古いデータではあるが、武田・笠原（2001）の調査では、約3割の教員が病弱教育に関する研修を受けられていない現状が報告された。

また、教員を対象とした病弱教育に関する研修機会の不足や、大学の教員養成課程のカリキュラムに

病弱教育の内容が十分に組み込まれることが少ないといった問題もある(平賀, 2006)。このような状況が大きく改善してきているとは言い難く, 小・中学校の通常の学級の担任が「教育実践上の葛藤や不安」(江藤・奥野・山本, 2005)を抱えながら, 病気のあ

る子どもを指導・支援している現状にあると考える。以上のことを踏まえると, 平成28年度の基礎的研究活動として, 特別支援学校(病弱)と連携して, 研究成果の普及を兼ねた研修会を複数の地域で実施できたことは成果の一つであると考えている。参加者アンケートの結果から, 今回試みたガイドブック(試案)活用研修は参加者のニーズに概ね応えることができたものとする。とりわけ, ガイドブック(試案)の有効性に関する意見が多く, 「病気の子どもの教育的ニーズや支援・配慮の内容が分かりやすい」という特徴を生かしながらも, より一層内容を充実させていきたい。その際, 参加者からいただいた改善に向けた意見もできるだけ反映させていきたい。

また, ガイドブック(試案)の活用方法については, 実際に活用してもらったわけではないため, 参加者の主観的な判断ではあるが, 研修テキストや実態把握の参考資料として有用であるという意見が多く寄せられた。

このように, ガイドブック(試案)の更新作業を進めるに当たって, その意義や活用方法について再確認できたことも成果であったと考える。

今後は, 学校現場の研修ニーズを踏まえた上で, ガイドブック(試案)活用研修の内容の更なる充実を図るとともに, この研修を教育センターや特別支援学校(病弱)が主体となって実施しやすいように, パッケージ化することも重要であると考えている。病弱班では, 研修ニーズのある教員に必要な情報を可能な限り届けられるよう, Webサイトにおける研究成果の公表に加えて, 本稿で報告したような研修会(セミナー)を開催するなど積極的に研究成果普及活動を行っていききたいと考えている。

なお, ガイドブック(試案)は, 2017年3月末に出版予定である。

謝辞

ガイドブック(試案)活用研修の企画・実施に当

たってご協力いただいた特別支援学校(病弱)の皆様に深謝する。

引用文献

- 江藤節代・奥野由美子・山本捷子(2005). 普通学級に在籍する病気をもつ子どもの学校生活支援に関する研究. 日本小児看護学会誌, 14(2), 30-36.
- 平賀健太郎(2006). 通常の学級において病弱児への教育的支援を困難と感じる理由—教師を対象とした自由記述の分析を通して—. 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 第29号, 71-78.
- 国立特別支援教育総合研究所(2016). 専門研究 B 「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究」(平成26~27年度)研究成果報告書. <http://www.nise.go.jp/cms/7.12409.32.142.html> (アクセス日, 2016-12-01)
- 武田鉄郎・笠原芳隆(2001). 院内学級における学級経営上の課題と教員支援. 発達障害研究, 第23巻第1号, 126-135.